



情報技術と新しい人間関係

鬼木 甫*

1. まえがき

最近における情報通信技術の進歩はめざましく、われわれの仕事や生活を一変させるに到っている。ファクシミリや多機能電話が普及して、他人との連絡が容易になり、また衛星放送・CATVをはじめとするニューメディアは、情報選択の自由を大幅に拡大した。企業においても、NC工作機械・ロボットによって生産の自動化が進み、VANによって企業間のきめ細かな結びつきが実現している。

経済分析の側面から見ると、科学の進歩と技術の発展は新しい生産方法を実現させ、新しい生産物・サービスを生み出すとすることができる。これにともない、仕事が高度化し、分業が進み、企業内でも企業間でも人々の間の連絡・協力・結びつきが重要になる。情報通信技術の進歩は、生産の第一線だけでなく、第一線の仕事を支えるさまざまな活動（管理・営業・記録・計画など）を効率化する点で重要な意義をもっている。

たとえば、電話やコンピュータは現代の必需品になっているが、もし突然電話回線あるいはコンピュータ・メモリーがすべて消滅したら、多くの活動が崩壊し、時代は何十年か逆戻りすることになるだろう。イギリスのSF作家ジョン・ウィンダムは、“Triffid”という作品（邦訳創元文庫）で、すべての人が突然視覚を失った社会の行方を描いているが、似たようなことは、情報通信手段を失った場合についても想像できる。

21世紀に向けて、情報通信技術はさらに発展

し、あらゆる側面で人間関係のあり方を変えたと予想される。現在のわれわれの状態は、21世紀の人々が、そのときに利用できる情報通信手段を失って逆戻りした状態に近いと考えてもよい。このような観点から、以下においては、情報通信技術が新しい人間関係を作る上でどのように役にたつかについて、筆者の予想と希望を述べたい。

2. 新しい人間関係の生成

社会経済の発展は、仕事の面でも生活の面でも人間相互間の新しい結びつきを必要とするが、情報通信技術は、その実現を助ける。まず、これがどのようにおこなわれてきたかを述べよう。

われわれ個人は、生まれてこのかた多くの他人と知り合いになり、他人との相互関連を通じて自己の活動範囲を拡大し、深化してきた。新しい人間関係は、まず、家族など血縁を通じ、また近くに住んでいることから生ずる地縁関係を通じて作られる。共に教育を受けることから生ずる「同窓」もこれに近い。経済が発展し、職業の分化が進むにしたがって、「職能関係」を通じる新しい人間関係の生成が重要になった。現代においては、交通・通信手段の発達により、多くの人が距離の制約を克服し、遠く離れた「同業者」と密接なコミュニケーションを保ちながら活動をおこなっている。

新しい人間関係は、血縁・地縁・職能関係から生ずるだけでなく、意図的な努力によっても作られる。第1は、最近「ネットワークング」と呼ばれている方法であり、第2は、マスコミなどを利用する「広告」である。

「ネットワークング」とは、地縁・職能関係などあらゆる機会を捉え、興味をともにする人々のグループが次々に形成され、新しい人間関係が作られることを指す。そのため、同好会、

*鬼木 甫 (Hajime ONIKI), 大阪大学社会経済研究所, 計量経済学部門, 教授, Ph. D.
情報経済論

研究会、コンファランス、委員会、協議会などの場が使われる。初対面の人と交換する名刺の増加は、「ネットワーキング」の象徴である。最近普及しているパソコン通信・BBSもその一種である。個人的な紹介や手づるを利用し、また新しい機会に関する断片的な情報を素早くとらえることによって、新しい人間関係は作られる。

このような「ネットワーキング」が、最近におけるわが国社会の発展の重要な基盤になっているという主張がある。とりわけ、大企業におけるような組織的活動の機会に恵まれない中小企業・サービス業において、「ネットワーキング」による新しい機会の発見が重要になっているとのことである（たとえば生産会社が第三者の紹介によって新たな原料の仕入先を見出す、サービス会社が消費者モニターの反応を利用して新しい商品を作り出す、など）。

新しい結合を作るための第2の方法は、広い意味の「広告」であり、広報・マスコミなどの手段を使って、自己の立場を明らかにし、新しい相手が「名乗り出る」のを待つことである。求人・求職の広告、製品販売・サービスの広告などその例にこと欠かない。ラジオ・テレビ・書物・雑誌などのマスコミは、そのための強力な手段である。

「ネットワーキング」と「広告」は、血縁・地縁・職能関係だけに頼る場合と比べて、新しい人間関係を作り出す機会を大幅に増大し、わが国社会の発展の基盤になっていると考えられる。しかしながら、新しい人間関係を生成する手段として見ると、この両者はいくつかの制約をもっている。

まず、「ネットワーキング」は、そのためのグループが既存の地縁・職能関係を通じて作られることが多く、限られた機会しか提供できない。「ネットワーキング」による新しい人間関係は、何らかの意味で当事者の近くに位置する相手との間で作られるか、あるいは偶然の機会を利用して実現されるかのいずれかである。ごく身近に適切な相手がいるときでも、手づるもなく、偶然の機会にも恵まなければ、その相手との結合は作られない。

放送型の手段を使う「広告」の場合には、「広告費」の支出を増加させて新しい相手を見出す確率を高めることができる。しかしながら、実際には「広告費」の負担に耐えられない場合も多い。

（このため、中小企業は大企業に比べて広告・宣伝の分野でハンディキャップを負っている。また、個人の新聞広告は3行以内に収められることが多い。）また、広告・広報はその受信側に問題を生ずる。受信者は、自分が必ずしも興味を持たない情報を大量に受入れ、その中から興味のある情報を探し出す作業（モニタリング）をおこなわなければならない。すなわち、かれは、大量のノイズ（自己に不要の情報）に耐えなければならない。ノイズが過大であれば、受信者は広告を一切拒否することもある。

3. 未知の人との「通信」

21世紀の人々は、どのような手段で新しい人間関係を生成するのであろうか。それは現在の「ネットワーキング」あるいは「広告」の欠点を克服するものだろう。新しい人間関係は、地理的距離や職能関係の近さという制約を離れ、必要に応じて国内外の広い範囲から見出されるであろう。また、それは「広告」のようにノイズをもたらさず、情報を必要な限りにおいてしかも十分に伝えることができる手段であろう。

以下において、このような要求を満足する情報通信手段を「システムX」と呼ぶことにする。Xは未知の人と新しい関係を作るためのシステムであり、未知の人との「通信」手段であると言える。それは具体的にどのような種類のシステムであろうか。

システムXはもちろんまだ存在していない。現存のシステムからXについて類測するために、「データベース上の通信」というものを考えてみたい。

データベースは、情報を組織的に記録・蓄積し、与えられた基準に沿ってそれを検索するための手段である。他方、通信という情報活動は、（情報の記録・蓄積に対し）情報の伝達を目的とするが、通信においても、伝達の対象となる情報を集中し、一時的に蓄積することは意味がある。情報の集中・蓄積がコンピュータによる

処理を可能にし、直接の伝達によっては実現できないさまざまなサービスの提供を可能にするからである（たとえばパケット通信）。

データベースによる通信は、データベース中に伝達すべき情報（メッセージ）を記録し、それを共用することによって自然に実現することができる。それは、情報の蓄積・共用、情報の検索、情報の伝達という3種類の仕事を同時に実現する。検索をともなう通信は、従来存在しなかった新しい種類の通信である。それは、未知の相手、通信の目的によってはじめて特定される相手を見出し、そこに情報を伝達するという新しい機能をもたらす。

ニューメディアであるとオールドメディアであるとを問わず、通信手段は何らかの制約を克服して情報を伝達する用具である。われわれの情報伝達は、空間的・時間的に制約されている。電話やラジオ・テレビは遠方の相手への情報伝達の手段であり、距離の制約を克服している。また、文字・印刷物は、情報を現在から将来に伝える手段であり、時間という制約を克服している。

データベースは、距離あるいは時間とは異なった種類の制約を克服する通信手段と考えることができる。データベースは、無秩序に並べられた情報から、必要な情報を高速にかつ組織的に検索できる。したがって、通信手段としてのデータベースは、情報内容によって通信相手を選択したい場合に威力を発揮する。

たとえば、筆者が住居の近辺で、筆者とほぼ同じ力量を持つ囲碁の相手を見出したいと考えたとする。現存の通信手段を使うかぎり、この

ような未知の相手を探し出すことは（碁会所にたびたび出入りして偶然の機会をとらえる、すなわち碁会所をネットワークとして使用する以外には）まず不可能である。しかしながら、もし大阪府の“Go-player's database”が利用可能であれば、筆者は必要な条件をデータベース上に記憶させ、他のだれかがそれを検索し、筆者に連絡するのを待つことができる。あるいは、他のだれかがすでにデータベース上に条件を提示していることを予想して、その検索を成功裡に実行し、望む相手を見つけることができるかもしれない。

現在においては、必要な情報や望ましい通信の相手が社会のどこかに存在していても、その所在がわからないために情報を手に入できず、望ましい通信を実現できないことが多い。「情報氾濫・情報公害」などの用語が示すように、現代社会においては、供給情報量が増大し、当人にとって無用の情報すなわちノイズが氾濫しているために、この種の不便はむしろ増大しているかもしれない。

21世紀のシステムXは、このような「データベース上の通信」と似たシステムではないかと考えられる。もちろん、Xは多様かつ大量の情報検索と伝達を低コストで実現しなければならず、それを可能にするための設計・ソフト作成などの作業が必要である。今すぐにXを作るとは、技術的には可能であってもコストが高すぎるであろう。筆者は、Xが全くの「夢物語」とは考えないが、バラ色の雲はまだ地平線上にとどまっているように思われる。